

人間関係における「承認」を考えるために

To think about "approval" in relationships

渡 邊 秀 司

要 旨

この小論は人間関係における「優しい関係」が変化しているのではないかという疑問から、その変化の理由として「承認」という考え方に影響をされているのではと考え、「承認」について以前から述べられている内容について整理を試みるものである。

キーワード：優しい関係・承認・「キャラ」・SNS

はじめに

宗教への関心と並行して人間関係のありかたについて関心を持つようになり、小論を積み重ねてきた。人間関係の在り方に関心を持つに至った動機の一つとして、「オタク」と自認する人達が人間関係を構築する方法を考えたいと思ったことがある。以前「オタク」へのインタビュー調査を行って以来、意識的にオタクコミュニティに関わりながら、彼らの人間関係構築の方法を注意深く見つつ、そのための考察を並行して進めてきた。その過程でひとつの疑問が生じるにいたった。

いままで人間関係を考える際に、土井隆義がいう「優しい関係」¹⁾を軸に考察を進めてきた。「優しい関係」とは「予定調和の世界から出ることはなく、相補関係を傷つけるような対立は、表面化しないように慎重に回避」される「摩擦のないフラットな関係」(土井 2009:12)とされている。あくまで私が参与しているコミュニティという条件ではあるが、「予定調和」「フラ

ットな関係」という特徴は観察されることがあった。表面的には対立的な言説が展開されることはなく、コミュニティに所属する者たちとの間には、ある種の賞賛のやり取りが展開していた。それを観察しつつ、対立を表面化させないフラットな関係性があると同時に、それがもたらす苦しさ、その関係から少しでも外れてしまったときに生じる、コミュニティからの排除という現象が発生する可能性を個人的にみていた²⁾。「優しい関係」という考え方は人間関係を考える際に意義のある視点をわれわれに提供している。その点に関しては現在においても変わりはないだろう。

先ほど述べた疑問であるが、「優しい関係」は完全に日常の一部となってしまったのではということである。筆者は、「優しい関係」が日常の一部になることで、より精密なものに変化しているのではないかと考えている。もちろん、「優しい関係」を日常的に行う人がすべてではない。そうではない人も存在する。そうした「優しい関係」を人間関係の原理として受け入れていない人たちを、この小論で論じることは

できない。この小論で対象とする人は「優しい関係」を人間関係の原理として受け入れ、それを軸に日々の生活を営む人たちである。

この小論は現代社会の人間関係全てを論じ切ることのできる内容ではない。しかし、これからの人間関係の大きな流れとして、「優しい関係」は軸になる考え方になる可能性が高い。今述べてきたことをより精密に考察するために、この小論はある。いずれは「優しい関係」の精密化を考えていく必要はあるが、その前提となる議論のひとつをこの小論で整理したい。それは、「承認」という言葉に関わる議論である。承認という言葉の説明する場合、「条件なしの承認」という言葉が語られるが、白崎らの研究によると、他者を価値づけること、評価や判断をしないという以上のものであり、それは自分の本質から、一人のひととしての他者に向かって、意志を持って積極的にyesという態度であるとされている（白崎他 2021:94）。「誰かに認められる」ことそれらの議論が注目する「承認」は、自己が他者に認められるという意味で使用される言葉である。そのような「承認」という言葉の背後にある考え方が、現代の人間関係にどのような影響を与えているのだろうか。最初にその点について整理を進めたい。

「承認」と自己

斎藤環が承認について論じる内容を最初に述べたい。斎藤は「終わりある物語と終わりなき承認」という小論で、現代に生きる若者の傾向の一面について述べていくが、マズローの「欲求段階説」に触れつつ、若者の承認欲求はマズローの仮説とは逆転しているのではという（斎藤 2013=2016:42）。マズローの「欲求段階説」とは、人間はそれぞれの段階での欲求を満たすことを目標として、絶えず成長を続け、最終的には自己実現に向かって進んでいく存在であることを主張するもので、「生理的欲求」→「安

全の欲求」→「所属と愛の欲求」→「承認の欲求」→「自己実現の欲求」と段階づけ、下位の欲求から順番に満たされていくという考え方である。斎藤は若者の欲求充足が「衣食住より承認」という逆転をしているという。そこに「キャラ」という概念を入れたうえで、その承認が「キャラの承認」である点を問題としてとらえる。

「キャラ」とは「キャラクター」の略であるが、どういうものなのかここでも整理をしていく。土井は「キャラ」について外キャラと内キャラに分けて考察する。土井の言う外キャラとは、人々に共通の枠組を提供していた「大きな物語」が失われ、価値観の多元化によって流動化した人間関係の中で、現代社会を生きる個人が直面するそれぞれ別の人間関係に対応するための「キャラ」である。付き合う相手や場に対応する形で外キャラは変化していく。「大きな物語」と言われるような一貫した価値観、アイデンティティの存在があったとされる状況下では、やってはいけないこととされたきたことではあるが、「キャラという言葉で示されるような断片的な要素を寄せ集めたものとして、自らの人格をイメージする」のではという（土井 2009:23-4）。内キャラについて、土井はりかちゃん人形の造形の変化がネオテニー（幼形成熟）化していること、漫画やアニメといった娯楽作品のキャラクターの成長のなさについてのべつつ、それらが暗示することとして「人生の中で成長していくことに対する懐疑と、生まれもった自分へのこだわりの強さ」を指摘したうえで、社会生活の中で変化することのない生来的で固定的なものが内キャラであるとしている（土井 2009:29-31）。

斎藤が言う「キャラ」は、「単に『性格』だけを意味しない。それは個人の意思とは無関係に設定される、コミュニケーション・ネットワークにおける位置づけの事だ（斎藤 2013=2016:42）」というものであり、土井のいう「外キャラ」に相当するものだと考えられるが、その位置が

自分で選択することができない。中間集団の中で自主的に棲み分けと属性の決定がなされた結果生じたものとして考える（斎藤 2013=2016:42-3）。

斎藤と土井の両者が言うのは、キャラと無関係に生きることの困難さであり、筆者もそれに同意する。今まで述べてきた「キャラ」が、現代を生きる人たちの人間関係を形成する上で基本としてあり、「キャラ」を承認されることが、自己の承認とつながるのではないかと推測される。

そのうえで、斎藤は「キャラとしての承認」を求めることは、承認を他者とのコミュニケーションに依存することになるとし、承認とは個人の能力、成績や経済力など客観的な評価を根拠としているもので、客観的な基準が承認の基準として存在している限りにおいて、孤立を恐れることはないはずであるが、現代において承認の基準は相対的かつ間主観的な「コミユ力」に一元化されている。そこでは「キャラ」が「承認のしるし」であり、主体が承認を他者にゆだねることは、極端な流動性に主体がさらされるということではないかとしている（斎藤 2013=2016:43-4）。

斎藤は「承認」という言葉について、ラカンの「鏡像段階」の議論の展開について概説しつつ、以下のように述べていく。

「自己意識は単独で自立した存在ではなく、自己意識をもつ他者の存在に全面的に依存する。つまり自己意識は他者を排除することで自己の実在性を確認しようとするが、そうすることでかえって他者への依存度が高まってしまい、今度は自己意識は自分自身の排除へ向かうことになる。この過程は自己と他者の双方の側で起こる。そのような相互関係にあることを認めあうことで、承認は成立する。つまり承認＝相互承認なのである（斎藤 2013=2016:46-7）」

さらに斎藤は承認のダブルバインドについて考察を深めたうえで、「承認の病」の回避方法について述べていくが、この小論では議論が散漫になる可能性もあるので、詳細は斎藤の議論を読み進めていってほしい。

「キャラ」という考え方については、正木大貴が整理した内容がある。正木は「キャラ」について「その時に自分が振る舞うべき『役割』といった程度の意味しか持たない。一緒にいる周りの人たちによって『キャラ』を使い分けるのである（正木 2018:29）」と斎藤たちが述べている内容と同様のものを述べつつ、正木は自らの臨床経験から導き出す論として、対象とする若者の対人場面における「表面的関係」と「内面的関係」³⁾という言葉を用いつつ、若者の「表面的関係」の重視について述べていく。若者たちは意見を戦わせるのが当然の議論の場において、「反論」をせずに「質問」という形をとり、違いを匂わす程度で早々に引き下がり、プライベートな食事内容を決める時にも、相手の選択の幅を狭めないようにして結論をもう一度相手にゆだねていく。それは、「内面的関係」を持ちえないのではなく、むしろ「内面的関係」を求めつつ、しかし身近な友だちにそのつながりを求めて、拒否されてしまったらどうしようという不安が強く、「恥ずかしい」思いをするような内面の告白をすることを避けた結果として、表面的な付き合いにとどめることを選んでいるのではという（正木 2018:30）。

今まで述べてきた議論の内容をふまえながら、この小論で注目すべき点は「相互承認」という点である。自己と他者の双方が必要とされていること、それに伴う人間関係の流動性は現代社会において重要な一面としてあるだろう。「コミュニケーション能力」と「キャラ」による人間関係の展開について、その問題点はどこにあるのだろうか。

「承認」とSNS

正木が展開する承認欲求についての心理学的な考察は、この小論においても参考となる議論である。ここでは正木の現代における「承認」の特徴に関する議論を主に概観していく。

正木は現代におけるSNSを代表とするソーシャル・メディアの発展を重視している。ソーシャル・メディアによって誰もが多くの承認をもらえる可能性が格段に広がり、一部の有名人や芸能人しか持ちえなかった発信力を、一般人が持つことができるようになった。これによって誰からも承認を得ることができる可能性と同時に、誰からも承認を得たいという欲望を持つことになったという（正木 2018:38）。

さらに、現代の親子関係について正木は述べていく。現代の親は子どもに期待していることを暗に遠回しな行動と態度で示すものだという、子どもは親の意図を察するだけである。その条件を満たすことができなければどうなるのかと言え、今の普通の親子関係においては、ひとつの条件をクリアできなくてもそれをとがめることはない。「大丈夫、次の機会でがんばればいい」というような、さらなる条件を作りながら勇気づけ、子どもとともに悲しんでくれるのである。子どもは親を悲しませないために「条件」を作動させる。「親は自分を見捨てるようなことはしない。けれども条件を満たさなければ失望させてしまう」ので、失望させることは避けねばならないという（正木 2018:39）。冒頭で述べたような「無条件の承認」ではなく、「条件付きの承認」が展開するのである。

先ほど述べた斎藤の論にもあるように、現代において以前述べられていたような承認の基準は重要ではない。「こうでもいいし、こうでなくてもいい（正木 2018:39）」のである。親の承認に支えられながら親に承認の条件を与えられてきた人たちは、条件がクリアにできないに

しろ、とりあえずその条件に向かって進んでいけば、親から否定されることはないし、それで自分も安心できていた。ところが逆にそういった条件が与えられず、条件すら自分で決めていいと言われると、途端に動けなくなるのだという（正木 2018:39）。

さらに、正木は若者の友人関係について述べていく。仕事を持たない若者の人間関係を考えるうえで、まず対象として考えられるものは友人関係であるが、この「リアルな社会」においても「キャラ」を用いることになる。「キャラ」を使い分けることで居場所を確保しようとするのだという。「しようとする」というのが重要で、自分の居場所があるかどうか確認することは簡単ではない。しかし、友だちから認識される「○○キャラ」というものは、「○○というキャラ」でいる限り、そこにいていいという指標であり、ある種の安心感を与えると同時に自分を縛ることがあり窮屈さや疲れを感じるのだという（正木 2018:40）。

今まで述べてきたようなことをふまえたうえで、SNSと承認欲求のかかわりについて正木は論じていく。「リアルな社会」とSNS上での承認のあり方は事情が異なるとしている。「リアルな社会」では、自分が承認されていることを実感すること自体容易なことではないが、SNS上ではそれが比較的明瞭でわかりやすいとし、Twitter や Instagram の「いいね」や、YouTubeの再生回数などを事例としながら述べていく。「インスタ映え」⁴⁾とは、そうなるための写真を撮るためにはその人のセンスや情報力、行動力などを必要としていて、その人個人の能力の評価につながるものと理解されているとしている。「自撮り」と呼ばれるものは自己顕示欲がつよく、やりすぎの感じを持たれる可能性があり、「インスタ映え」は「ほどよい」自己開示になるのではという（正木 2018:41）。

正木は「いいね」の機能について、『白雪姫』の女王の鏡が果たす役割と同じだという。直接

的に「誰かがわたしを賞賛してくれている」という感覚を持つことが可能で、多くの人から肯定的な反応を受け取ることができる。同時に相手に対して「いいね」をすることで、親子を承認してくれるような効果を発揮する。SNSにおいても相互承認の過程が見受けられるのではというのである。さらにTwitterやInstagramの大きな特徴として、それほど難しいスキルを使わなくても「加工」が可能であるという。内面的、外見的に自分の嫌な部分を簡単に隠すことができる。徹底的に良いところだけを見せ続けることが可能であり、実際の間人間関係では難しいような自己コントロールもある程度可能である。TwitterなどSNSでは自分の意に沿わない相手を「ブロック」することができる。それは、双方向コミュニケーションでありながら自分からのメッセージも、他人からのメッセージも比較的控制しやすいくということである賞賛されやすく、拒否されにくい、うまく利用すれば「無条件の承認」を得ているかのような幻想を持つことも可能なのではという(正木 2018:41-2)。正木は最後に「ひとから認められる存在になりたいというより、ひとから認め続けてもらえる存在になることを求めているようにも見える(正木 2018:42-3)」という。

結 び

これまで今までの「承認」に関わる議論の一部について述べてきた。以前から「優しい関係」について注目し考察を続けてきたが、先ほども述べたように「優しい関係」は以前から述べてきたそれとは変化をしている。筆者はその変化について、日本社会の文化としての「世間」を背景とした「自己責任」と「ずるい」という考え方の影響について整理を試みたことがあるが、「優しい関係」に基づく関係性を基盤として「承認」が行われているのだとすると、自己承認あってこそ相互承認も可能なのだというより、自ら

が形成する人間関係によって自己の存在を承認していくことの重要性が増しているのではないか。斎藤が言うような自己承認のための「客観的な基準」が「キャラ」に変わったという話は、「キャラ」を形成し、お互いに承認を与え合うことそのものが重要であり、その際には他者を害することのない「承認される条件」を共有したうえで、その条件を明確な目的としつつ行為を行うために必要不可欠な要素としての「キャラ」があり、「相互承認」を簡便に行うことのできるSNSを用いることで更なる承認欲求の充足を図っているということなのだろう。

これは推測でしかないが、自分自身から明確な「条件」を提示することは、他者の承認欲求を否定することにつながるのかもしれない。自己顕示をすることは承認を得るためには必要であるが、正木が言うように自己顕示欲が目立つことは忌避され、「インスタ映え」のようなほどほどの自己顕示に抑えることがよしとされることから、関係性を構築している人たちの中で「ともに作り出した条件」と言える条件をお互いに設定しつつ、相互承認に基づく自己の形成を行っているのだろう。それは「優しい関係」が論じられた頃に問題視されていた、人間関係の重さを回避するための試みなのかもしれない。しかし、それによって人間関係の重さは解消されたのだろうか。それともその重さをいったん留保したにすぎないのだろうか。以前述べた「自己責任」との向き合い方、今回概説した「承認」という考え方にともなう自己形成のありかた、それらの周辺にある「世間」という思考がどのように影響を与えているのか、この疑問を整理することが今後の研究課題となるだろう。

注

- 1) 「優しい関係」については様々な論及があるが、最近のものでは菅野博史が「『優しい関係』再考—〈あるべき自分〉と〈本当の自分〉のあいだ—」という論文において、土井などの論考を

基に再検討を加えている。また、2022年1月に石田光規が『「人それぞれ」がさみしい—「やさしく・冷たい」人間関係を考える』という書籍で「優しい関係」についても言及しながら、「人それぞれ」という言葉に含まれる意味について考察をしている。これらの論考も検討しながら、人間関係のあり方を精査し続けていくことが肝要だと考えている。

- 2) 筆者はこの小論で論じるような人間関係の研究を始める以前から、小規模なゲームイベントから、大規模な同人誌即売会などに参加し続けている。本文の内容は、小規模なゲームイベントに継続的に参加した時に感じたことである。また、大学の授業において「優しい関係」に関わる人間関係についての講義を受け持たせていただいており、その受講生から意見、感想を毎回の授業終了時にもらっている。ここで述べていることは、イベント参加時に観察して得たもの、授業終了時の受講生の意見、これまでの人間関係についての研究からみる個人的な推測でしかない。この推測をより厳密な議論に展開していくことが、継続的な目標の一つとしてある。
- 3) 正木の言う「表面的関係」と「内面的関係」という言葉であるが、岡田努がその論で述べており、それによると、友人との間で親密で内面を開示するような関わりを「内面的関係」、友人はそうした関係を取ってはいないと認知し、現実に内面的かわりを避けている現象を「表面的関係」としている(岡田 1999:433)。
- 4) 「実用日本語表現辞典」によると、「写真共有 SNS「インスタグラム」(Instagram) に写真をアップロードし、公開した場合に、ひととき見栄え良くステキに見える(映える)、という意味で用いられる表現」である。

参考文献

- 土井隆義, 2009年, 『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット。
- 斎藤 環, 2016年, 『承認をめぐる病』ちくま文庫。
- 正木大貴, 2018年, 「承認欲求についての心理学的考察—現代の若者とSNSとの関連から」『現代社会研究科論集』12:25-44。
- 岡田努, 1999年, 「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」『教育心理学研究』47-4:432-439。
- 白崎愛里・並木崇浩・山根倫也・小野真由子, 2021年, 「対話・他者との「出会い」の哲学から考える無条件の肯定的関心: Schmidの論文から学ぶ」『関西大学心理臨床センター紀要』12:93-103。
- 渡邊秀司・長光大志, 2021年, 「オタクの人付き合い—『自己責任』と『世間』—」『佛大社会学』45:81-86。
- 実用日本語表現辞典(URL:<http://www.practical-japanese.com/>) 11月29日閲覧
- 菅野博史, 2020年, 「『優しい関係』再考—〈あるべき自分〉と〈本当の自分〉のあいだ—」『帝京社会学』33:1-17。
- 石田光規, 2022年, 『「人それぞれ」がさみしい—「やさしく・冷たい」人間関係を考える』ちくまプリマー新書。

(わたなべ しゅうじ)

佛教大学非常勤講師)